
三痕歌

雨秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三痕歌

【Nコード】

N6212D

【作者名】

雨秋

【あらすじ】

「断罪の階段の呪いを解説して欲しい」「気弱そうな中学生『崎野徹』の依頼で学校に乗り込む政秋。しかし、その呪いには裏があった……。

第一話 蒼い空 秋の雲

濃い霧が立ち込めている。

彼は、一歩一歩足を進めるが、土を踏む感触がない

始めから道などないのかもしれない。

「ねえ」

後ろから、声をかけられた。

「本当にいくの？」

「……心配してくれているの？」

「ッ！ 誰がッ！！」

彼は、微笑を浮かべてまた歩き出した。

「いらつしゃいませ、どのような御薬をお探しですか？」

狭い店に入ると、いきなり10才ぐらいの男の子が、茶色の髪の毛を揺らして現れた。

着ている白衣は、明らかにサイズが合っていない。

胸には、名札をつけていて、信じたくないが認めなくてはならない現実を見た。

「アオツキフタハ
蒼月双葉ノ店員」

明らかに、親のお手伝いにしか見えない少年は

「あの……正社員ですか？」

「社員？……ここは会社じゃないですよ？」

アルバイトではなく、店員だった。

「ですよね……。あの『白鴉』^{ハクア}って言う薬を買いに来たんだけ

ど……」

双葉は、存在しない薬の名に、一寸も驚かずに微笑み、

「ああ、じゃあ奥へどうぞ。ご案内します」

店の奥へと、手を引いて行った。

奥の部屋と言っても、店の奥にあるレジの後ろの小さな部屋だった。双葉は、その部屋に合ったパイプ椅子に座らせて、

「じゃあ、店長を呼んできますね」

部屋を出た。

壁が白くてとても綺麗な部屋だった。

しかし、右端にある机の上は書類が山積みになっていて、非常に汚かった。

しばらく、手遊びをしていると、店長なる者が部屋に入ってきた。

「お待たせしましたー」

屈託のない、素敵な笑顔で参上したのは、

「……同じ年？」

すなわち、中学生にしか見えなかった。

白衣の下には、黒いベストの下にワイシャツを着ていた。

どこにでもいる、中学生のようだ。

胸に『薬屋政秋／店長』と書かれた名札のついた白衣を脱ぐと、それを書類の陰になっていた、椅子に掛けた。

「残念でしたー、薬屋の店長が、中学生と同じ年のはずがないしいねー」

「そうですねえ……」

政秋は、微笑むとパイプ椅子に座り

「っで、僕に何をして欲しいのかな？」

いきなり、本題に入った。

「……ハイ、あの……この店の近くにある、坂上中学校
って知ってますか？」

「知ってるよ」

「・・・僕は、その学校の風紀委員なんですけど・・・それで、この間階段で転んで怪我をした人がいるんです・・・それも何人も」
「ふうん。で？」

政秋は、さして興味が無いのか。いつの間にかルービックキューブを回していた。

「・・・はい、学校には7不思議があるんです。それで、そのひとつが『断罪の階段』」

「ふうん」

「転んで怪我をした人は、全員その断罪の階段で怪我をしたんです」
「すつごい、偶然？」

「いいえ、過去にも何人もあの階段で足を滑らして、怪我・・・亡くなってしまうた人も」

「・・・つで、僕に何をしろと？」

興味が無いのを通り越して、もはや不機嫌そうだった。

「・・・あの、『呪い』とかなら、僕達にはどうしようもないし・・・その・・・」

政秋は、完成したルービックキューブを膝の上におく。

「『呪い』を払えと・・・」

「・・・そうです」

政秋は、ため息をつくとき口を開いた。

「じゃあ、まずはその階段を見てみよう・・・そうだな、次の土曜日。明日にでも学校を案内してくれると助かるんだけど・・・頼まれてくれる？」

「・・・はい」

政秋は、微笑むと立ち上がり。

「ありがとうございます・・・じゃあ、明日」

「ありがとうございます」

第二話 白い朝 蒼い薄明

「ただいまー」

家には誰も居ない。

徹は、玄関の電気もつけずに靴を脱ぎすてた。

電話がなっている。

正直うるさい……。

でも、

「ハイもしもし……」

出てやる。

「もしもしい？薬屋薬店の薬屋ですが……忘れ物はありませんか？」

「……」

澄んだ、高めの声の少年だった。

薬屋薬店とは、近所の商店街にある薬店の名前で。向かいにできた

「マシモトツヨシ」のせいで、客が減った店である。

徹は、今日その店を訪れた……。

制服のズボンには、店の住所と「白鴉」^{ハクア}と書かれたメモ用紙が、綺麗に折りたたまれて、入っているのを、左手で確認すると……。

「ケータイ……忘れてたよ、徹君？」

「ッ！？僕、名前言いましたっけ……あっケータイか……ども」

ども

「其れはいいんだけど……」

何がいいと言うだ。

「明日の約束だけど、待ち合わせ時間と場所を決めるのを忘れていたよね」

「あ」

「……」

「っで、明日の午後1時に坂上中の校門前でどう？」

「・・・大丈夫です」

「わかった、このケータイはそのときに返すね」

「はい」

「じゃあ」

電話が切れた。

本当は、うそだと思っていた。

「妖怪や、悪魔を祓ってくれる薬店」

店に入ったときも、まだ信じきれていなかった。

何しろ、情報源が記憶という、とても信用できないものだったから。

記憶 其れはいつの間にかあった、自らの記憶だった。

土曜日。

徹が、学校に着くと茶髪の少女 否、少年が校門の柵の上にしゃがんでいた。

「危ないです」

「大丈夫だよきつと」

笑顔で言つと、右手を柵において飛び降りた。

「おはよう」

「おはようございます」

「・・・ご機嫌右斜め下？もしくは上・・・左でも然しかり？」

「・・・とりあえず、服はそのままがいいので、シャツは仕舞って下さい。僕も一応風紀委員なんで」

「Va bene」

言葉の意味はわからないが、シャツはしまってくれた。

「いきましよう」

「武器はなんか持ってたほうが良いかな？」

「いらなと思います・・・とりあえず、風紀委員には殺傷能力のない武器の携帯を義務付けられていますか・・・」

「ふうん、じゃあ、ゴム弾なら、銃でもいいのかな？」

「だめです、とりあえず日本国憲法ぐらい守ってください」

「誰も、持つてるなんて言っていないけどね」

「・・・行きましょう・・・政秋さん」

徹は、政秋を連れて学校に入った筈だった・・・が、

「ケータイ・・・いらなの？」

「あ」

「・・・」

忘れていた。

「物忘れもほどほどに」

ポスターのような、笑顔で言われた。

いつそ、写真でとって校内ポスト

「今、変なこと考えてなかった？」

「いえ・・・そんなことないです」

「僕のケータイのアドレスと番号を勝手に登録していたから」

「え・・・へ・・・えつとその・・・あれ？」

「やっぱり、変なこと考えてたんだ」

違う・・・きつと違う、急に話題が変わったから云々・・・

しかし、実際に考えていたのだから、反論の仕様がな

「行きましょう」

「だね」

断罪の階段というのは、北校舎の三階にある階段のことだった。もともとは、どこにでも有りそうな怪談として、有名だった。

この階段は、普段は12段なのに、夜になると13段に増える。

「特に、妖気および霊気などは見当たらないけど・・・」

そして、その階段では・・・

「でも・・・不思議だね。事件が起こるのは、いつもここなんですよ？」

「ハイ」

罪を犯した者が裁かれると・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6212d/>

三痕歌

2010年11月17日03時03分発行